東北大学名誉教授、歴史学者
平川（ひらかわ）　新（あらた）氏
東北大学東北アジア研究センター長、東北大学災害科学国際研究所所長、宮城学院女子大学学長を歴任
現在は東北大学名誉教授、歴史学者
「戦国日本と大航海時代」を執筆（和辻哲郎文化賞受賞）

県民共済　宮城の歴史さんぽ道　特別編　第8弾

支倉常長帰還400年 partⅡ

― 大航海時代における政宗公の外交戦略 ―

パーソナリティ・リポーター
松井（まつい）　実那子（みなこ）氏
仙台を中心に活躍するタレント・リポーター・モデル
宮城県民共済ラジオ番組
「みやぎスマイルプロジェクト」パーソナリティ

東北大学名誉教授、歴史学者 **平川 新** 氏 × パーソナリティ・リポーター **松井 実那子** 氏

慶長遣欧使節出帆は、仙台藩にとって世界との交易の足がかりをつくる壮大な計画でした。大航海時代における政宗公の外交戦略とはどういうもので、現代に生きる私たちにどのようなメッセージを遺しているのでしょうか。

今回の企画は、東北大学名誉教授の平川新先生をゲストにお迎えして、エフエム仙台「みやぎスマイルプロジェクト スマイル・インフォメーション」のパーソナリティ松井実那子さんと『支倉常長帰還400年』にちなむ特別対談を実施しました。

この対談内容は、令和2年10月18日に放送するエフエム仙台のラジオ番組内で公開され、その後、宮城県民共済のホームページ内にアーカイブ（音声）を公開します。対談の一部をこちらの紙面でも公開いたしますので、ぜひご覧ください。

※ホームページ内のアーカイブ（音声）の公開は、予告なしに中止することもございます。あらかじめご了承ください。

スペインとポルトガルが目論んだ世界制覇

松井　平川先生の自己紹介からお願いします。

平川　東北大学東北アジア研究センター長、災害科学国際研究所長などを経て、今年の3月まで宮城学院女子大学の学長を務めていました。日本近世史、特に江戸時代史が専門で、30年ほど前に仙台市史の編集委員を依頼されたことがきっかけで、慶長遣欧使節の研究に関わるようになりました。

松井　東北大学災害科学国際研究所の初代所長に就任されたのは、どのような経緯からですか。

平川　2003年の宮城県北部地震を機に文化財の保存活動を始めました。その後2007年に防災科学研究拠点を立ち上げて、学内の研究者と文理連携の災害研究を開始しました。それが災害研の前身になりました。

松井　本題に入りますが、大航海時代に世界の海を支配したといわれる南蛮、即ちスペインとポルトガルのアジアでの植民地政策はどのようなものでしたか。

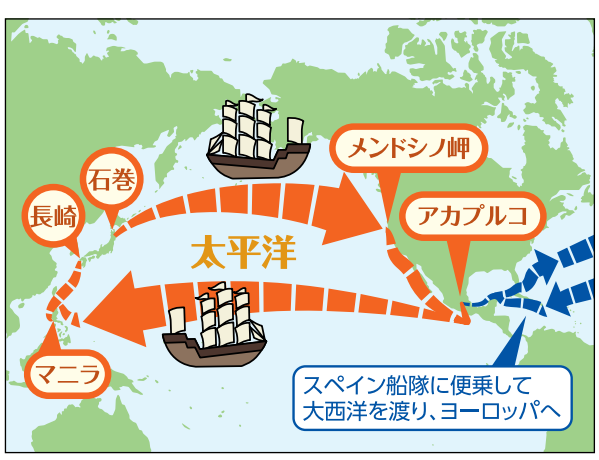
平川　スペインもポルトガルもキリスト教を世界に広め、貿易を盛んに行う目的で、海外に植民地をつくろうと躍起でした。やがてあちこちで衝突が起きるようになり、両国はトルデシリャス条約を結びました。この条約は子午線を境に、東と西で世界を半分にしようというもので、地球全体を支配しようという野望がそこにはありました。

サン・ファン館（石巻市渡波）の復元船サン・ファン・バウティスタ号

慶長遣欧使節派遣の背景とは

松井　今から407年前にサン・ファン・バウティスタ号が、牡鹿半島の月浦から出帆しましたが、その背景には何がありましたか。

平川　南蛮貿易の中心は、九州をはじめとする西日本です。貿易は大きな利益になるので、政宗公や家康も目論んではいましたが、当時の江戸は人口10万人程度で、仙台はもっと小さな城下町。貿易商人にとって、あまり魅力を感じる都市ではなかったようです。フィリピンもメキシコもスペインの植民地で、その間に航路が拓かれていましたが、三陸に寄港して、そこで貿易を行えばお互いにメリットがあるのでは、という宣教師の提案があり、政宗公はメキシコとの貿易一番乗りを目指しました。仙台領には鉱山がたくさんあり、金や銀が貿易の重要な品目になります。メキシコやスペインからは、ラシャ（毛織物）などの高級品が輸入できました。



サン・ファン・バウティスタ号の航路

松井　結果的に政宗公の通商交渉はうまくいかなかったわけですが、理由は何だったのでしょうか。

平川　徳川幕府がキリスト教に警戒心を抱いていたことがあげられます。一方で南蛮との貿易を望んでいたことも事実です。スペインがキリスト教の布教にこだわっていたのは、日本を武力で征服するのは無理だとわかっていたからです。戦国日本では秀吉の天下統一により、巨大な軍事国家が突然出来上がったという歴史があります。秀吉の二度に亘る朝鮮出兵では、一度に15万人もの軍隊が朝鮮半島に送り込まれました。

松井　すごい人数ですね。

平川　スペインが日本を武力で征服することはとても考えられなかったため、あとは思想を改造して、日本をキリスト教国家に変えようというのがスペインの戦略でした。しかし、スペインの目論見を警戒した幕府はやがて禁教令を出します。その頃、日本にやってきたのが新教国のオランダとイギリスで、日本での主導権を握るためには布教を条件にせず、単純に貿易だけをしようと近づいてきました。日本は大きな軍事力を背景に成り立っていたので、将軍の言うことを聞かないと大変な目に遭うことを諸外国が認識していたのです。

西洋列強に印象づけた軍事大国・日本

松井　日本の軍事大国ぶりが、スペインによる日本の植民地化政策に軌道修正をもたらしたわけですか。

平川　スペインにしてみれば、戦国時代の日本で大名同士を争わせてキリシタン大名をたくさん作れば、日本は支配下に入ると考えていました。また、スペインとポルトガルには、日本の軍隊で中国を征服しようという構想がありました。一方、秀吉の朝鮮出兵は、実は日本が単独で中国を征服する足掛かりとすることが目的だったのです。スペイン人やポルトガル人は、秀吉のことをエンペラドール（皇帝）と呼び、日本は帝国だと考えていました。秀吉の後に日本を治めた家康もエンペラドールと呼ばれるようになりました。

松井　政宗公はどう動いたのでしょうか。

平川　政宗公も当時の国際情勢を読む目に長けていました。政宗公は幕府が禁教令を出す直前に、スペインと貿易をするため使者の派遣を認めてほしい、使者の派遣にあたっては幕府と一緒に派遣しようと持ちかけます。しかし、時代は徐々にキリスト教禁教の動きに移っていきます。サン・ファン・バウティスタ号の出帆当時は豊臣家も存在していたため仙台藩の動きに配慮し、徳川幕府は仙台藩をキリスト教布教の特区として認めざるを得なかったのでしょう。その後、キリスト教禁教の動きはスペイン側にも伝わったため慶長遣欧使節団の交渉はうまくいかず、支倉常長一行はやがて帰国の途につきますが、きわめて大胆な行動でしたね。

松井　最後に支倉常長帰還400年にあたり、この歴史が今の私たちに伝えていることはどのようなことだと思いますか。

平川　多くの方は鎖国というと閉じこもり外交をイメージすると思いますが、日本は弱いから鎖国をしたのではなく、実は強くてヨーロッパ列強を完璧にコントロール下に置いていたと考えられます。わがもの顔のスペインとポルトガルを追放したのですから、いかに将軍の力が強かったかがわかります。秀吉の朝鮮出兵以降、260年にわたって日本には海外戦争がないということにも着目すべきです。これほど長い間戦争がない国は、世界史にも例がなく、秀吉や家康がつくり上げた平和国家・日本をもう一度見直す必要があります。もちろん慶長遣欧使節も非常に大きな役割を果たしました。常長らが帰還して400年という節目の年を機に、改めて政宗公の構想や常長の貢献について考えてみるのも一興です。

松井　今日はありがとうございました。

特別対談の音声はこちらから

- 令和2年10月18日（日）
- Date fm（エフエム仙台）
- 夜7時～7時55分放送

ラジオ番組放送終了後は宮城県民共済ホームページ内の

「宮城の歴史さんぽ道」特設ページからもご聴取いただけます。

※ホームページ内のアーカイブ（音声）の公開は、予告なしに中止することもございます。あらかじめご了承ください。

Date fm Sendai 77.1